

主の名を呼び求める者は誰でも救われる

学長 長谷部 弘

°しかし、信仰による義については、こう述べられています。「心の中で『だれが天に上るか』と言ってはならない。」これは、キリストを引き降ろすことにほかなりません。’また、『だれが底なしの淵に下るか』と言ってもならない。」これは、キリストを死者の中から引き上げることになります。°では、何とされているのだろうか。

「御言葉はあなたの近くにあり、

あなたの口、あなたの心にある。」

これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。⁹口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。¹⁰実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。¹¹聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。¹²ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。¹³「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。

ローマの信徒への手紙 10 章 6-13 節

今日は「主の名を呼び求める者は誰でも救われる」という題でお話します。この説教題は、ただいまお読みいたしましたテキスト、「ローマの信徒への手紙」10 章 13 節からとったものであり、また今日のお話の結論でもあります。

ところで、私はこのところしばらく、大学や教会での礼拝で、「ローマの信徒への手紙」をもちいた講解説教させていただいています。以前から一度この手紙を自分の信仰のありようとつきあわせながら深読みしてみたいという思いがありました。背景には、カール・バルトの『ローマ書』や内村鑑三の『羅馬(ロマ)書の研究』といった 20 世紀前半の信仰的巨人たちがなぜ、自分の信仰と思想の中心においたのか、言い替えれば、福音的信仰理解の原点においたのか、という理由を自分なりに確認してみたいという思いがありました。今日は 10 章を取り扱いますので、これまでに全体で 16 章あるテキストの六割ぐらまで読み進んできたわけですから。説教の準備過程で、毎回、時間をかけながら何度も読み直し、最後にいくつかの注解書を参考に自分の読み方で足りない部分を補正する作業を続けてきました。そこでは、パウロの信仰の姿勢や、独特の着想、そして独特の論理展開の仕方があり、その発見にしばしばはっとさせられました。これまで何度も読んでいながら、はじめて「ああ、こんな

意味だったのか」と気付かされる瞬間が何度もあったことに深く感謝するばかりです。

ところで、さっき名前をあげた内村鑑三ですが、近代日本の代表的クリスチャンであり、私が若い時に全集が出版されたので、それをきっかけにその作品を読み親しんできました。幕末日本に生まれ、日本が15年戦争に突入する直前の1930年にその生涯を終えました。不敬事件や義戦論、非戦論の主張、無教会運動などで同時代の人々にもよく知られていたクリスチャンでもありました。彼は、その晩年の大著『羅馬書の研究』(1924年)の前書きで、「ローマの信徒への手紙」を以下のように絶賛しています。

「使徒パウロによって口授されたこの書はキリスト教の真髄を伝うる書である。この書を解せずしてキリスト教を解することはできない」。「神の恩恵の福音の講述である」。「キリストに現れたる天父の愛の宣伝である」「これに勝るの楽しみその他にありようはない」。

内村が絶賛に近い表現で高く評価したこの手紙は、ご存知のように使徒パウロによるものです。その執筆の目的は、第一章の11節に記されているように、ローマの信徒たちに、「霊の賜物」であるイエス・キリストの福音の恵みをわかちあい、力づけたい、というところにありました。彼は、それを、特に信仰義認論を軸に彼流の論理でしっかりと説明しようとしたのです。口述筆記ですから、同時代の信仰者たちとのコラボでもあります。

その展開の特徴は、まず古代ユダヤ教の教説全体を「律法主義」とも呼ばれる行為義認主義、「行い」によって救われる、という考え方に集約的に代表させたところにあります。イエス様の山の上や平野で行った説教を前提としていることは明らかです。その上で、神が人間に与えられた福音である「信仰による義」という考え方と対置させ、次のように論を展開しました。まず、私たち人間が、誰一人例外なく、神の前にいかに手前勝手な「罪人」であるかを説きます。そのような神から切り離されて生きる「惨めな」私たちのために、神の子イエス・キリストが、「人の子」として十字架と復活という不思議な業を行ってくださった。それは、ご自分を燔祭の捧げ物とすることによって神様が私たちに向けておられた「怒り」と「呪い」を身代わりとして受け、死の棘から私たちを解放してくださる、というやりかたを採用することによってであった。結果として、私たちは、「人の子」イエス・キリストに結びつくことによって、私たちとともに歩んでくださる神から、恵みと希望とを確かにいただくことができる。パウロは、その揺るぎない救いの現実というものを、彼流のシステムティックな思考と骨太の論理、そして信仰的確信とによってしっかりと解き明かそうとしたのです。

実は、先ほど読んだ箇所直前で、パウロは、「キリストは律法の目標であります、信じる者すべてに義をもたらす…」と書いています。その上で、モーセの言葉を引用し、よくも悪しくも「律法による義」とは、掟を守って生きる人の正しさ、掟によって生きる正しさなのだ、と力説します。これは、古代ユダヤ人の生き方の範型とも言える考え方です。神様に義とされた者として神の祝福の中に生きることが、本当の意味で人

間が「生きる」ことである、というのです。律法とは、神様の恵みそのものでありました。ユダヤ人の先祖、イスラエル人は、まさに律法に生きる人々でありました。文化的に神から与えられる律法に従って生きるという規範的な生き方に乏しい日本の社会には馴染みにくい生き方なのかもしれません。

それが、イエスの時代になると、ユダヤ社会の最右派であったファリサイ派律法学者たちにおいて、律法の全ての規定を完全に守ることが律法の義に生きることだと極端に強調して解釈され、しばしば律法を与えて下さった神様というお方のリアリティが薄弱になってしまっていた。これが律法主義であり、信仰による義によって批判される律法による義であった。それは同時にイエス・キリストに出会う前のパウロの生き方でもありました。すなわち、ファリサイ派の中のファリサイ派として、ユダヤ的律法主義に徹し、自分の生涯を捧げようとする生き方でした。

しかしそのパウロが、キリスト・イエスとの出会いによって、ファリサイ派的な「義人として生きる」ことの、見当はずれであることを思い知った。神様が認めてくださる「義」とは、自分自身の力、人間の力で、自分を満足させるようなやり方で獲得しようとしても、得られない。義なる者として良き業(=律法を守る)をまっとうしようとしても、神様を前にしては律法を守り切ることでできない自分を発見するだけである。そのような律法主義のもと葛藤が、「信仰によって義とされる」という教え、考え方によって大転換するのです。

信仰義認論とは、行いではなく、信仰によって神様から義とされる、という考え方です。教科書などでは、教科書においては、16世紀西欧における宗教改革のリーダー、マルティン・ルターが「発見」したと説明されることが多いのですが、この考え方は、実は、もともと新約聖書のローマの信徒への手紙においてパウロが展開し、クリアカットに説明しようとしていたものなのです。

パウロは、6節で、旧約聖書の申命記30章12節と13節を念頭におきながら、「信仰による義」を説明します。申命記のこの箇所は、出エジプト後四十年にわたる荒野の彷徨を続けたイスラエルの民が、いよいよ約束の地、カナンに入ろうとするとき、モーセが、それまで神の恵みの律法であった十戒にしたがって生きることの重要性を再度解き明かそうとする場面です。恵みの律法を「天」や「底なしのふち」に求めてはならないとするモーセの言葉を引き合いに出し、私たちに救いをもたらす恵みの律法である神の御言葉は「あなたの近くにあり、／あなたの口、あなたの心にある。」というのです。すなわち、口でイエス・キリストを主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、救われるのだ、というのです。だから、「人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われる」ことになる。だから12節の「ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かに恵みになる」ことがはっきりと述べられるのです。

全ての人は、神様の眼差しからすれば、イエス様の働きによってすでに救いのうちに入れられている。しかし、しかし、全ての人が何もせずに、自分を中心に据えた生き

方、自分ばかりを見つめた生き方をしている限り、その救いの恵みに浴することはできない。神様が私たちひとりびとりに何をしてくださっているかを知り、どんなお方であるかを学び知る必要がある。イエス様が「求めなさい、そうすれば与えられる」、とか、「狭い門から入りなさい」とかいった表現で語られたことはそれを意味するのです。

私は思うのです。たとえ皆さんの中にキリスト教の教理や信条を受け入れがたいと思われる方々がおられたとしても、それ自身は問題ではない…。なぜなら、礼拝を中心として聖書のメッセージがしっかり語られ続け、イエス・キリストの福音が語られ続ける限り、そこには神様の大きな恵みの業が必ずや働いてくださり、不思議な導きによって一人びとりを信仰へと導いてくださるからです。

私たちは、福音に示される神のとてつもなく大きな、愛と恵みを経験する時、イエス・キリストを信じ、イエス・キリストに従って歩む生き方、すなわち良き業、良い行いを実践する生き方へと強く促されることになります。それは、神の和解と平和という豊かな恵みに与る「新しい生き方」へ不断に導く神の大きな力であり、希望に他なりません。その力と希望に信頼することが必要なのです。

教職員の皆さん、信仰をお持ちの方も、そうでない方も、聖書を通し、神の御言葉を聞き、心の中で何かしら動かされるものを経験する方は、パウロが言うように「心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われる」生き方へと導かれている方でありま

す。宮城学院は、今、時代から非常に厳しい課題を突きつけられて歩まねばならない状況に直面しています。しかし、神様が建てられた学校ですから、神様が必要であるとお考えであれば、しっかりと導いて必要な働きをさせてくださるのだと思います。これからも教職員礼拝を通して神様の恵みを豊かに分かち合い、互いに励まし合いながら、歩んでまいりましょう。そして、福音に裏打ちされた宮城学院の使命を果たしてまいりましょう。

(2025 年 5 月 21 日)